

二〇一六（平成二八）年九月、私は主に保健師を対象にしたアレルギー対策の保健指導研修会の講師として教室の前に立った。テーマは「ダニアレルゲンの環境整備対策」である。本題に入る前に、熊本地震被災地での活動にふれた。

「避難所の生活者の健康管理のキーワードは、『布団干し』だと思っています。ダニアレルゲンが多いとされる寝具をどう扱うか。それが、日常生活より重要とされる訳があるので。それを説明しましょう」

教室の研修生たちは耳を傾けていた。

布団干しプロジェクト

六月下旬、熊本市保健所の会議室にいた。私の前に座ったのは、NPO「ソナエトコ」に所属する桑野恭輔氏だった。ボランティア活動として避難所の布団干しに取り組んでいた。

「日常を取り戻してほしいと思い、避難所の布団干しを支援していま

中臣さんの 環境衛生ウォッチング

第52回

熊本地震・ 避難所の 衛生対策

〈3〉

す」

具体的なやりかたは、こうだ。

「晴れた日の主に午後、屋外にブルーシートを敷き、折りたたみできるパイプ椅子を二〇〇〜三〇〇個並べます。その後、生活者の人たちに自分の布団を運んでもらって、干してもらうのです」

布団を干すだけではない。

「布団を干すのは、一〜二時間です。その間、足湯に入って、ハンドマッサージを受けてもらいます。そして、マッサージをするボランティアと話をして、地震のときや地震後のことを吐き出してもらい、心の疲れを少しでも癒してもらおうようにしています」

横に座っていた保健師が、話を補足した。

「布団を干して生活スペースが空いたとき、掃除をするいい機会なのです。避難所のなかでは、段ボールのパーティションで囲っただけで、となりの音は筒抜けです。生活者の女性、掃除機の音が迷惑をかけると思って、掃除機を使うことができないと話していました」

私はこう思った。布団干しをする時間帯に、館内放送をして「みなさん掃除の時間です。生活スペースや通路など、掃除機やほうきなどで清掃しましょう」と呼びかけるなら、となりに気がねなく掃除ができるようになる。

熊本市保健所の環境衛生監視員

は、五月からの避難所環境調査を実施して、当初、布団の管理の問題点に気づいた。

「生活スペースの布団の敷きつ放しが問題です。ダニやカビなどの発生による健康被害を防ぐ必要があると思っています。対応案として、生活ルールを館内放送など呼びかけたり保健師が個別指導したりするなど考えられます」

こうした背景のなか、布団干しプロジェクトは有効な手法だと感じ

平成二八年六月九日の熊本日日新聞では、「布団干し『日常取り戻そう』、熊本市の避難所、NPO呼び掛け」の見出しがあつて記事が続く。「八日は晴天となり、希望者が敷布団や毛布約三〇組を玄関前の広場に持ち出し、…パイプ椅子の上に広げた」

その後に、避難生活者の女性たちのコメントが掲載されていた。

「避難後初めて干せた。避難スペースに掃除機をかけてきます」

「地震前は晴れた日によく布団を干

していた。きょうは気持ちよく眠れそうです」

記事の横の写真には、避難所から布団を持ち出して、天日に干す人たちの姿が写る。にこやかな顔が印象的だ。

桑野氏が、前述の「ソナエトコ」の活動報告書を広げた。

「天気にもよりますが、月曜から土曜までの午後に避難所へ行つて、布団干しを支援してきました。ボランティアは二人か三人です。今後も続けていく予定です」

報告書の写真には、色とりどりの布団が並ぶ。写真にコメントがあつた。

「毛布もタオルケットも並びました！ これだけ並ぶと誰のものかわからなくなるので、テープにお名前を書いて貼りました」

「自分の布団を干したら次はお隣さんのお布団というように助け合いで、どんどん出てきました」

「自分の家族の布団にコロナをにかけてほこり取りをしています」

布団干しプロジェクトは、大きな



中臣昌広

なかとみ・まさひろ

●保健所 衛生監視員

健康弱者を救う

五月なかば、私は熊本市保健所・環境衛生監視員とともに避難所のひとつを訪れた。避難所環境調査のためだ。

児童館のプレイルームが居住スペースになっていて、約二〇の段ボール製パーティションの区画がある。パーティションの出入り口は一人が通り抜ける空間があつた。その床に、握りこぶし大の薬剤容器が置かれていた。

管理者が説明した。

「支援用に送られてきたものです。空気の殺菌用の薬剤だと聞いています。希望者にお渡ししました」

二酸化塩素を成分とした薬剤だ。容器を手にとってラベルの文字を見たとき、目の粘膜にかかる刺激があった。成分が揮発している証拠だ。私は、二酸化塩素の消毒効果についての文書を見たことがある。その内容は、実験室的な確認ではウィルスに対しての効果があるというものであった。

しかし、私はひとつの疑問をもっていた。天井高が五メートルくらいある避難所の空間では、揮発成分が広い空間に拡散して濃度が低くなっている、思うような効果を上げることが難しいのではないだろうか。

逆に、人の呼吸器近くに容器を置くことによって、成分を吸い込んでしまい、体への影響を与える可能性がないかと危惧した。

私は、管理者の男性へこう話した。「アレルギー体質の人や化学物質に過敏な人にとっては注意が必要でしょう。使わない選択肢もあると思



います」

横で聞いていた、市保健所環境衛生監視員が言った。

「別の避難所で、化学物質過敏症の女性が整髪料の臭いに反応して調子がわるくなつて、救急車で運ばれました」

混乱する避難所では、ひとつの空間に多くの人たちが共同で生活する。一人ひとりの生活習慣は様々だ。整髪料を使う。化粧品を使う。揮発性の蚊取り薬剤を置く。私が見たなかでは、他人の生活臭が気になるためか、芳香剤を置いている人もいた。

それらの成分が空気中にただよってしまふ。化学物質過敏症の人にとっては、化学物質を吸い込んだり触れたりすることで、目や喉の粘膜

への刺激だけではなく、頭痛、吐き気、息苦しさなど様々な症状を引き起こす可能性がある。ときには、こうした化学物質に敏感な人たちがいることも、避難所内の掲示板、配布物などで生活者の人たちに知ってもらうことが必要だろう。

五月下旬のNHKテレビで、震災の教訓を生かすための番組「東日本から熊本へ」があった。画面に、障害のある子をもつお母さんの、避難所のなかで世話が思うようにいかなかった様子が映った。次の言葉は強烈だった。

「避難所は、人の命を守るために設置されたものですよね」

避難所のなかでは当初、一時的にも健康リスクが高い人たちが共通のスペースで生活していると認識することが大切である。

避難所運営の早い段階で、化学物質過敏症の例にみるような健康リスクがある人たちに症状が出ないように、生活スペースを部屋別に分ける必要があると思う。

コミュニティが命を救う



六月下旬、熊本市に隣接する益城町の避難所の小学校を訪れた。一〇人以上が体育館のなかで生活する。段ボールベッド、布のパーテーションが家族ごとの区画にある。プライバシーに配慮されている一方で、コミュニティがあるのが心配になった。

六〇代男性の言葉が印象的だった。「生活者自らが、掃除班、トイレ掃除班をつくってやっています」

発災二カ月後でコミュニティが成立していたのだ。避難所のなかでの協力が、生活者たちの何よりの心の支えになったのではないだろうか。

だが、多くの避難所でコミュニティが形成されてこなかったのも事実だ。熊本市花園公民館の管理者の紫垣氏は、こう言った。

「実際には、マニュアルどおりにはいきませんね。生活者のなかからリーダーを選んで、自治会をつくる話もみなさんに説明しました。けれ

ども、リーダーで動けそうな人は、昼間に仕事でここにいないのです」

閉鎖に至るまでの二カ月半で、結局、生活者の人たちの自治会はできなかった。ただ、コミュニティにながる仕掛けがあった。

「ラジオ体操を毎日二回、朝八時二〇分、夕一七時三〇分に行っています」健康の確認や生活にリズムをもたせる工夫をした。熊本市の避難所では、高さ一五〇センチの段ボール製パーテーションでプライバシー確保がされた。

その半面、単身高齢者の心の孤立や認知症移行への心配があった。ラジオ体操は、少なくとも、そうした防止策として、加えて安否確認で効果があったと思う。

また、ラジオ体操の際にあいさつを交わし、体操を終えて二人、三人が雑談するのは、コミュニティ形成への第一歩に違いない。

はたして、避難所から仮設住宅へ移ってからコミュニティは形成されないのだろうか。

二〇一六（平成二八）年八月二四

中臣さんの環境衛生ウォッチング

日の読売新聞ウェブ版では、「益城・仮設入居者に自治組織づくり助言 仙台の元自治会長ら」の見出しがあった。

記事は、こう書かれている。

「東日本大震災で仙台市太白区に建設された『あすと長町仮設住宅』の元自治会長と支援した大学准教授が二二、二三両日、熊本地震の被災地を巡った。甚大な被害を受けた益城町では、県内最大の「テクノ仮設団地」（五一六戸）で入居者と交流し、仮設住宅での自治組織づくりについて助言した」

交流会では、東日本大震災のときのコミュニティのつくり方やその維持、共助の体制づくりといった、仮設住宅から災害公営住宅に移行していく五年間の経緯が話された。経験者の話を聞くことは、今後の参考になる。

これから避難所とは違い、仮設住宅の生活期間は年単位になる可能性が高い。そのなかで、孤独死が起きないようなコミュニティの形成を願っている。